

良いものをなぜ伝えたいのか

〜母の日によせて〜

(二テモテ一・五〜七)

キリスト教が起源の祝日と言えはまず挙げられるのがクリスマス(降誕祭)だが、最近ではイースター(復活祭)も徐々に有名になってきた。「商業主義に毒されている」と言つて嘆く牧師先生たちもいるようだが、個人的には「知られないよりは知られた方がいいと考え、その上で真の意味を伝えるのが我々の使命だと思ふ。しかし実は母の日もまた教会初の記念日の一つだ。元々は南北戦争中、「母の仕事」と称し敵味方を問わず負傷兵の世話をしたアン・ジャービスの娘、アンナが日曜学校の教師をしていた母のために教会で記念会を持ちカーネーションを贈ったことがその起源である。子どもの成長における母親の役割の大切さは言うまでもない。女優チャップリンが演技の面白さに目覚めたのは劇団員をしていた母が身振り手振りを交えて聖書物語をしてくれたことがきっかけだとも聞く。今朝の箇所においても母(祖母)の信仰が子に伝えられている。以下、信仰の性質について二つのことを考えてみたい。

一、手渡していくべき信仰

この箇所においてパウロは愛弟子であるテモテの信仰を純粋なものだと称賛し、かつそれが祖母ロイスと母ユニケに最初に伝えられたものであることを述べている。

ちなみにある学者たちは「純粋な信仰」とはユダヤ教のことを指すと解するようだが、これは根拠が乏しい。というのも「純粋な信仰」と訳されている全く同じフレーズが「テモテ一・五にも用いられており(新改訳では「偽りのない信仰」と訳される)、それがキリスト教信仰を指すことは明白である。というわけでテモテの信仰は母や祖母の感化によるものであることが解るのだが、ここには信仰の神髄がある。つまり信仰とは脳内を一步も出ないような観念ではなく、近くににいる人に感化や影響を与え、更にその感化によつて伝えられるべき実態を伴うものだという事だ。しかしながらどうだろう。教会では「信仰は個人の問題だから、押し付けてはいけない」というようなことが聞こえてくることとがままある。確かに真の信仰は強制すべきものでもなく、強制できるものでもないが、大いに勧められるべきものだ。元青山学院長の深町正信牧師も信仰の継承のため常に祈り、また自らの信仰を伝えていくことを反省をこめて勧めているが全く同感である。

二、人を生かし、勇気づける信仰

ではなぜ信仰は手渡していくべきものだとと言えるのだろうか。簡単である。キリスト教信仰には比類なき絶大な価値があるからである。

パウロはテモテの内に宿る純正なキリスト教信仰とその実践を思い起こしつつ、テモテに注意を与えている。前後の文脈から考えると当時恐らく三〜四十歳くらいであったテモテは牧会しているエペソ教会で様々な困難に直面していたようである。一面において彼は非常に従順な男であり、それは彼の長所でもあったが、よく言う「長所は短所」の言葉通り、その優しさが裏目に出て臆病になるところがあったのだろう。そんな彼のために霊の父であるパウロは「偽りのない信仰」、ひいてはその信仰を与えた神の賜物である聖霊の力をもう一度思い起こすよう注意している。つまり真の信仰は人を強め、勇気づけ、あらゆる困難に打ち勝たせ、私たちの人生に力と愛と慎みとを増し加えさせるものなのだ。こう考えるとかの内村鑑三が「思想を残すこともよい。事業を残すのもよい。財を成すのもよい。文学や哲学もよい。しかし最も大切なものは信仰をもつて人生をまじめに生き抜くことだ(『後世への最大遺物』)」と言ったことはもつともなことだといえる。信仰を持つということ天国

行きのフリーチケットをもらうことと解するのは実に陳腐化であり矮小化である。信仰は私たち弱きものに真の勇敢さと高尚さを与え、結果として天国への道を私たちに歩ませる素晴らしいものなのだ。

* * *

初代の文部大臣にして一橋大学の創設者といえは森有礼だが、彼の後妻、寛子(岩倉具視の娘)は有礼暗殺の後キリスト教に入信し、以来朝祷二時間、晩祷一時間の生活を欠かさなかった。そしてその家系からは綺羅星のようなキリスト者たちが生まれたという。ある日彼女のところに孫娘が訪ねてきた。祖母と起居を共にして過ごしたのであるが、ある夜、孫娘は何かの物音で目が覚めた。よく聞くと祖母の声である。更に耳を澄ますと聞こえてきたのは五〇人を超える一族の名。祖母寛子は一人一人の名を挙げて彼らを祝福し、とりなして祈っていたのだ。かの孫娘は大いに感動し、ほどなく信仰に入った。その名を関屋綾子という。熱心なキリスト者にしてYWCAや平和運動に身を投じ、東松山にある原爆の凶丸木美術館館長も務めた方である。友よ、信仰は実に良いものだ。良いものを子に与えようとしなない親がどこにいるか。信仰継承はあなたの祈りからはじまる。祈ろう!